

子どもを持たない意思表示が印象に及ぼす効果

田村 達

Effects of mentioning becoming childless on impressions of the mentioning person

TAMURA Toru

本研究は子どもを持たないと意思表示する人物の印象の検討を目的とした。結婚と子どもを持つことに関する態度は変化してきているが、その意思表示は進化論的な観点ではパートナーとなる相手の適応度を下げる行動であるため、対人魅力を低下させる可能性が考えられる。大学生376名が、男性あるいは女性対象のプロフィール情報を読み、その印象を回答した。対象は、病気のためあるいは個人的な考えのために子どもを持たないと述べるか、何も言わなかった。その結果、男性で個人的な考えから子どもを持たないと述べる対象が魅力的に評価されないことが示された。対象の意思表示による印象の差異と性差が表す意味、測定手法による影響が議論された。キーワード：子どもを持たない意思表示 印象形成 対人魅力

This study aimed to examine an impression of a person who communicates their prospects to be childless. Although people's views on marriage and having children has changed over time, such information could lower their attractiveness because, from an evolutionary perspective, it would decrease fitness of both a person and their partner. A total of 376 university students read some pieces of profile information of a target male/female person and answered a questionnaire on their preferences of the target person. The target person either mentioned becoming childless because of their illness, their policy, or not mentioning anything. The results showed that the target person, who was male and mentioned childlessness because of his policy, was not rated attractive. The differences of preferences due to childlessness, a target's/participant's sex, methods for measuring, and its implications are discussed.

Keywords: mentioning becoming childless, impression formation, interpersonal attraction

I. 背景

厚生労働省は、2022年の日本の出生数は過去最低の77万747人であり、統計を取り始めてから初めての80万人割れを公表した（厚生労働省, 2023）。戦後の出生数は1973年に第二次ベビーブームの209万人を記録してから減少を続けており（内閣府, 2022）、子どもの数を高齢者の数が上回った2000年前後から少子化問題が言われるようになった。

少子化は結婚の問題と合わせて論じられることが多い（永井, 2011）。永井（2011）によれば、子どもを

持ちたいという欲求の充足は結婚の対個人的機能の一つであるが、これによって社会の成員が増加することになるため、結婚は対社会的な機能も果たしていることになる。子どもを持つ・持たないは個人の選択の自由に関わる問題であるが、持たないという選択の集合的な結果として起こる少子化は、地方・国といった社会の存続を危うくする喫緊の課題と捉えられてきた。従って少子化は、「個人」の自由と「社会」の利益とが葛藤を引き起こす問題の一つと言える。

「子どもを持たないこと」は、最近まで否定的なニュ

アンスを含むものであつたらう。竹家（2008）は、不妊は男女ともにトラウマやスティグマになりうるが、「女性の役割は子どもを産むこと」というステレオタイプのために、特に女性にとって困難が大きいと述べている。子どもを持たない人へのネガティブな反応とは、必ずしも「社会」としての必要性という観点からだけでなく、伝統的性役割からの逸脱と見なされることによる部分も大きかったのかもしれない。だが現在は、多様性の尊重とともに、結婚の意義にも子どもが重要視されなくなってきたとも言われる（Finkel, Hui, Carswell, & Lawson, 2014）。そのため、伝統的な考え方と異なる選択をするという理由のみで非難されることは少なくなってきたかもしれない。

それでは、子どもを持たないという選択をする人の印象とはどのようなものということになるのか。そういった人物に対する人々の印象、特に、異性として、あるいは生涯を共にするパートナーの候補としての印象は、まだ明らかではない。本研究は、子どもを持たない意思表示がその当人の印象に及ぼす効果を検討することを目的とする。

1. 子どもを持たない選択に対する態度

現状で、結婚を希望する人は少ないわけではないが、結婚して子どもを持つことに対しての人々の意識は変化しているようである。国立社会保障・人口問題研究所（2023）による第16回出生動向基本調査によれば、2021年のデータで「いずれ結婚するつもり」と回答している人は、前回2015年よりも減少傾向にあるとは言え8割を超えている（2015年：男性：85.7%、女性：89.3%、2021年：男性：81.4%、女性：84.3%）。だが、同調査での「結婚したら子どもを持つべき」という質問に対して同意する回答は大幅に減少している（2015年：男性：75.4%、女性：67.4%、2021年：男性：55.0%、女性：36.6%）。

これは、結婚と子どもを持つことが単純に結びつかなくなってきたことを示している。これについて Finkel et al. (2014) は、アメリカ人にとっての結婚に関する興味深い分析を行っている。彼らによれば、アメリカ人の結婚と生殖とは明らかに乖離が続いており、「子どもは幸福な結婚にとって重要である」と考えるアメリカ人は、1990年の65%から、2007年の時点でも既に41%まで減少している。このような意識の変化は結婚の目的・意味の変化に伴っていると考えられる。1700年代後半から1850年代辺りまでのアメリカ人

にとっての結婚は、経済的な生産性、子どもや高齢者のケア、教育といった経済的、政治的、実際的な目標において、夫婦が助け合うためになされるものであった。その後、1965年辺りまでに都会の賃金労働者が増えてくるにつれて、子どもを産み育てることや家事に向く性質を持つとされる女性がその役割に特化する方が効率的と考えられ、女性の労働が家計の中心から離れることに伴って、結婚は両者の愛情、情熱と親密さの欲求を満たすためのものになった。そして、女性やマイノリティ解放のための社会運動を背景に、今日までのところで、結婚は選択の自由と自己表現を追求する手段となった。Finkel et al. (2014) によれば、結婚は、「生殖のために社会的に認められた唯一の手段」から「夫婦の個人的成長を促進する機能」となり、結果としてそれは、不可欠な制度ではなく個人的達成のための手段として、ライフスタイルにおける多くの選択肢の中の一つと見なされるようになった。これに伴い理想の結婚パートナーも、人生の中心的目的である自己発見の追求を支えてくれる存在で、かつ、それを促進してくれる存在でなければならなくなったのだという。

日本社会においても結婚に対しての認識の変化に同様の流れが見て取れるだろう。山田（2017）は、太平洋戦争後から高度経済成長期を経てオイルショック後の低成長期に未婚化・晩婚化の傾向が顕著になったことの原因として、結婚での生活水準上昇が見込めなくなってきたことを挙げている。経済的合理性の意味合いが薄れてくるその時期から、平成の時代にかけて恋愛結婚がもてはやされ、そして現代へといたる日本の結婚の移り変わりは、Finkel et al. (2014) の述べる変化に重なると考えられる。

上で述べた第16回出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所, 2023) のデータが示すのは、そういった結婚の変化に伴って、子どもを持つには決心のようなものが必要になってきたということであるのかもしれない。大和田（2020）の研究では、男女未婚者と女性既婚者において、仕事・育児両立願望は希望子ども数に影響することが示されている。また、男性既婚者では、子どもを増やさなければならない自覚が希望子ども数に影響していた。これは、男女ともに仕事をするのは当然という前提があって、それとともに育児も行おうという決意があることで、子どもを持つという意識につながるということの意味するのだろう。そ

して既婚男性については、社会状況と自分とを関連付けて発生する、子どもの人数を増やさなければならないという義務感が、子どもを持つことの意識につながっているのだと考えられる。

結婚と子どもを持つこととの関係が変わってきている理由の一つの考え方として、子どもを持つことは経済的な不自由さをもたらすというものがある。平井(2019)は、既婚カップルの子ども数が減っている理由となる「出生の壁」の一つとして、育児や教育に投資する負担の大きさという経済的制約を挙げている。また、上の第16回出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所, 2023)でも、「子育てや教育にお金がかかりすぎる」は、「希望する数まで、今より子どもを増やさない理由」として最も多い(予定子ども数が理想子ども数を下回る夫婦の回答者の52.6%)。

山田(2017)は、生活水準の低下に関する不安のせいで起こる、生まれてくる「子どもにつらい思いをさせたくない」という気持ちが少子化につながっていることを、日本の少子化問題の特徴として指摘する。山田(2017)によれば、日本では「男女交際」「結婚」「出産」「子育て」「子の教育費」「奨学金という名の教育ローン」は相互に密接に関係している。例えば自分の子どもにかかる将来の大学の費用に対する不安は、子育てや出産への不安だけでなく、奨学金を借りている人と付き合っていないという意識の形で当人の男女交際にも影響する。また、結婚・子育ては生活水準を変えてしまいかねず、人並みの生活を送れなくなるという不安を高めるリスクが高い選択であるから、これにつながりうる男女交際すらも減ってしまうのである。人から見て恥ずかしくない、人並みの生活をせねばならないという意識のために、「好きな人と結婚しさえすれば幸せ」「子どもがいれば楽しい家庭」にはならず、特に将来、子どもから「～してくれなかった」と思われることは避けねばならない。

この議論によれば、子どもを持つことはその後の人生における幸福な暮らしを阻害しかねないリスク要因ととらえられているということになる。子どもを持つことで得られるかもしれない利益・恩恵は、将来的にコストを上回らないという見積もりになるのだろう。ここまでで、子どもを持つことに対する人々の意識が変化していることを述べてきた。子どもを持つことは、当たり前・自然なことから、選択の一つとなり、将来的なコスト・リスクとすら見なされるようになってき

ている。それならば、それを持たないという選択をする人に対する印象も、必ずしも旧来のように否定的になるとは予測できない。

2. 子どもを持たない選択に対する態度の性差

一方で、子どもを持たないことに対する態度には男女差が現れることを示唆する研究も見られる。

例えば伊藤(1997)の研究では、全国7地点の20歳～75歳の男女1004人を対象に行われた調査データを用いて、子どもを持たない夫婦に関する意識を分析している。「子どもをつくらない夫婦があっても良い」という質問への回答では、女性の方が男性よりも、また、年齢が若いほど、教育年数が低いほど、そして男性の場合は大都市に居住するの方が、質問に対して賛意を示すことが示されていた。さらに、回答者の接触する親族や友人、近隣の人々といったネットワークが大きくなるほど賛意が低下すること、特に親族のネットワークはこれへの賛意を抑制する「磁場」として作用していることが示唆された。

伊藤(1997)の結果からは、男性の方が女性よりも結婚したら子どもを持つべきと考えていることがうかがえるが、これとは逆の内容を示唆する研究もある。

コルムシ(2019)は、東京大学社会科学研究所が行った全国調査の20歳～40歳の男女に関する2007年～2013年のデータを用いて、ジェンダー意識と結婚に関する分析を行っている(サンプル数は3141人)。それによると、男性は女性よりも子どもを持つことが自由の妨げになると考えており、特に交際相手がいない場合にはこの考えがあるほど2年後に結婚していないこと、また、女性は伝統的性役割分業意識を持つほど結婚意欲が高いことが示された。コルムシ(2019)はこの結果から、男性は子育てを女性に任せたいと思っており、これに対する女性は、配偶者選択の際に相手が家事育児に協力的かどうかを重視することになると考察している。

また、丸岡(2016)は、高校生と大学生男女276名に対して将来の結婚と子どもを持つことへの希望についての調査を行っている。ここでは、高校生よりも大学生の方が、将来子どもを持ちたいと思う割合が高くなり、大学生男子回答者の75%、女子回答者の88%が「持ちたい」と答えていた。大学生男子回答者の「持ちたいと思わない」割合は24.6%で、これは女子の同じ回答の二倍以上であった。この結果に対して丸岡(2016)は、子どもを持ちたいという意識が高いのは

女子であり、男子は大学生になって負担感が現実的になってくると結婚や子どもに対して否定的な回答が増えるのではないかと考察している。

これらの研究からは、子どもを持つことに対する態度の一般的傾向には男性と女性とで次のような違いを読み取ることができるのではないだろうか。つまり、男性は、「結婚したら子どもを持つべき」とは思うが「子どもは自由の妨げになる」とも考えている。女性は、「子どもを持たないことはありうる」が、「子どもを持ちたい」と考えている。そして男女ともに、前者は一般的な態度に、後者は個人的な意見に近いと解釈することができるのかもしれない。

この場合、子どもを持たないという選択をする人に対しての印象は、特に自分の結婚相手と想定する場合に、女性の場合のみで否定的になると予測できる。

ただし、上で挙げた研究のデータの違いには留意すべき点がある。まず、データを収集した年代が大きく異なっており、伊藤 (1997) とコルムシ (2019) では10年程度、そこからさらに丸岡 (2016) では10年程度異なっているため、時代的・社会的背景の違いが回答傾向に影響している可能性がある。また、回答者の年齢層も異なっており、三つの研究の違いにはその点が反映されている可能性もある。コルムシ (2019) や丸岡 (2016) の回答者は比較的若い対象に限定されていることから、本研究で想定する大学生の研究対象者の意見にはより近いことが考えられる。

3. 対人魅力に関する心理学的理論

異性の印象は、心理学では対人魅力研究で主に扱われてきており、この領域には異性に対する魅力を進化理論によって説明しようとする考え方がある。これによれば、全ての動物の行動は、個体が自分の遺伝子を次世代に伝える可能性を最大にするように進化してきており、人の行動も、本人の意識はどうあれ、子孫の妊娠、誕生、生き残りを高めるように行われている (和田, 2016)。例えば身体的魅力、つまり容姿の良さは、他者に対する最初の魅力を最も頑健に予測する因子であると述べられているが (Eastwick & Finkel, 2008)、これは身体的魅力がその人の健康度や生殖的な適応度を示す指標となるためである (和田, 2016)。

この考え方に従えば、各個体が遺伝子を次世代に伝えるにはパートナーを探してつがいとなる必要があることから、一方からの子どもを持たないという意思表示は、それを行う本人だけでなく、表明された相手自

身の遺伝子の継承可能性を閉ざすことも意味する。そのため、そういった意思表示が相手からなされた場合、その相手に感じる対人魅力は低くなると考えられる。

だが、つがいでの役割の違いから、関係性の好みとパートナーの好みには性差が見られると言われている (Griskevicius, Haselton, & Ackerman, 2015)。男性の場合には、多数の子どもの父親となることが可能であることから、自分の遺伝子を残すためにできるだけ多くの女性を受胎させることが進化論的に有利となる。そのため、一人の相手と長期的なパートナー関係を結ぶよりも、短期的に複数の相手と関係を結ぶことが合理的となる。だが女性の場合には、出産に多大な時間と労力がかかることから限られた数の子孫しか持たず、従って自分の子どもを守り育てる手伝いをしてきて能力が高い男性を選ぶことで、遺伝子を残す可能性を高めた方が進化論的に有利である。すると、短期的なパートナー関係よりも、相対的に長期的な関係の方を志向することになる。世界中の多くの文化において、男性は女性の身体的な魅力を重視し、女性は男性の支配性や地位のサインを重視することが見られるのは、このことの反映であると言われている (Buss, 1989)。これは、男性の場合は健康な子どもを産むことができる相手を選ぶために、女性の若さと健康、つまりその女性の現在と将来の生殖に関わる能力というサインに敏感になり、その一方、女性の場合は子どもが生き残るために必要な資源 (食物、住みか、保護) を与えてくれるような、地位の高い男性を選ぼうとするためであるという。

この議論からは、子どもを持たないという意思表示をする人物に対して、女性と男性とで異なる反応が見られる可能性が考えられる。男性の場合は相手が自分の子どもを産んでくれるかどうかに関心の中心であるため、相手による子どもを持たない意思表示はその相手の魅力に直接的に反映されるのではないだろうか。その一方女性の場合は、長期的なパートナー関係を結ぶことができるかどうかの重要度が相対的に高いため、そういった意思表示は相手の魅力に反映されにくいことが考えられる。実際、女性は排卵前の妊娠する可能性の高い期間など、限られた条件で男性の身体的魅力やそれを示す性質に注意が高まることから、特に女性にとっては、パートナーとなりうる男性自身の遺伝子の質は最重要視されるものではないという考えもある (Buss & Schmit, 1993; Finkel & Eastwick,

2015)。

つまり、子どもを持たない意思表示を異性が示すことは、男性には相手の否定的な印象を形成させるが、女性にはその影響が小さいことが予測できるだろう。

ただし、異性の魅力や好意度についての評価は、それを測定する手法によって異なる可能性があることに留意せねばならない。Eastwick & Finkel (2008) は、大学生を実際に異性の相手に会って会話をすることができる「スピード・デート・イベント」に参加させて、印象を評価させている。イベントに参加する前に参加者の好みとして測定された質問紙では、男性は女性よりも身体的魅力を重視し、女性は男性よりも収入見通しを重視することが示されていた。だが、実際にイベントに参加した際の異性の好みは、男女ともに身体的魅力、収入見通し、人柄の良さによって予測されていたが、そこに性差は見られなかった。また、Eastwick, Eagly, Finkel, & Johnson (2011) の研究では、潜在指標を用いて理想的なパートナーを表す言葉と人の魅力を表す言葉との連合を測定している。その結果、参加者の性別に関係なく、身体的魅力語と理想的なパートナーとの連合が見られており、そしてそれらの連合は参加者の顕在的な好みとは関係が見られなかった。この結果からEastwick et al. (2011) は、理想のパートナーの好みを述べるような顕在指標は写真のような刺激に対する評価を予測し、この研究のような潜在指標は実際に会った際の好みを予測するのだろうと述べている。

4. 本研究の概要

ここまでで述べたように、子どもを持たないという意思表示をする相手に対して抱く印象は、その性差も含めて先行研究から複数の予測を立てることができて、それらは相互に矛盾することになる。そのため本研究は精密な予測を立ててそれに基づくというのではなく、より探索的な手法を用いて、相手についての一定のプロフィール情報を提示して子どもを持たない意思表示という点のみで印象が変化するかどうかを比較検討する質問紙研究を行うこととした。

子どもを持たない意思表示については、本人が病気のために子どもを持たないと述べる条件、本人が主義として子どもを持たないと述べる条件、それについて言及しない統制条件という三つの条件を設けた。「病気のため」という理由の場合には機能面の問題として子どもを持つことができないことを示すが、「主義と

して」という理由の場合には機能面に問題はないけれどもその意思がないということの意味する。前者の場合の方が、相手との間の子どもの持つ可能性は相対的に低いことを推測させるだろう。

また、本研究では相手が結婚相手として好ましいかどうかだけでなく、友人として、一晩限りの相手として、恋人としても好ましいと考えるかどうかを問う。川名 (2011, 2013) の研究では、男女の参加者に異性の写真を見せて、身体的魅力や社会的魅力を評価させ、そして「友達にしたいと思うか」と問うなど、これらの関係の相手としての評価も求めている。川名 (2013) によれば、男性参加者は、どの関係性においても性的・美的魅力を最も重視しているが、20代の男性については対人的魅力や社会的魅力もこれらの関係の相手としての評価に影響していた。これに対して川名 (2011) の参加者の女子大学生は、友達、一晩限り、恋人という関係においては美的魅力の影響力が最も高かったが、結婚相手という関係において最も影響力が大きいのは真面目さや有能性などの社会的魅力であり、美的魅力はその影響力が小さくなることを示した。本研究でも子どもを持たないという意思表示によって、友人として付き合う分には特に何も感じないが、実際にパートナーとなることを想定する場合には好ましく思わないとか、一晩限りであれば性的欲求充足の相手としては好ましいなどという反応が現れたりして、友人としてあるいは短期的・長期的パートナーとしての印象がそれぞれ異なる可能性もある。

こういった評価の差異は、異性のパートナーとなりうる人物として、相手との間の子どもの持つことを想定しうる人物として相手を見るのか、そうではなく一般的な印象を答えるかという点で変化する可能性もある。そのため本研究では、相手のプロフィール情報として男性の場合と女性の場合の両方を作成し、そして、参加者が異性愛の異性に当たる場合とそうでない場合とで区別して比較することにした。

つまり本研究は、対象の意思表示 (3: 統制・主義・病気) と評価者の性別・指向 (2: 異性愛の異性・それ以外 (同性愛の異性、異性愛の同性、同性愛の同性)) という二つの要因が対象の印象に及ぼす影響を、男性対象の場合と女性対象の場合とで検討することにした。

II. 方法

1. 研究参加者

2019年1月～2021年8月に質問紙調査を行った。国立大学生384名（平均年齢19.37歳、SD2.99）が質問紙に書かれた男性か女性どちらかのプロフィール情報を読んでその印象を回答した。質問紙は子どもを持たない意思表示の3つの条件で異なり、また、性別と性的指向に関する質問を含んでいて、これらで参加者を6つの条件に分けた。未記入を除いて、男性対象への評価を行った者194名（異性愛女性92名うち統制群30名、主義群32名、病気群30名。異性愛女性以外102名うち統制群33名、主義群33名、病気群36名）、女性対象への評価を行った者182名（異性愛男性75名うち統制群22名、主義群26名、病気群27名。異性愛男性以外107名うち統制群38名、主義群36名、病気群33名）を分析対象とした。

2. 質問紙の構成

質問紙は、評価対象の自己紹介カード部分と子どもを持たない意思表示部分、そして対象の印象を評価する質問項目で構成した。自己紹介カード部分は男性対象と女性対象の二種類を作成し、意思表示部分は、対象と実際に会った際の対象の発言であるものとして、対象は個人的な考えとして子どもを望まないと述べる主義条件、対象は病気のために子どもを望めないと述べる病気条件、子どもについて何も述べない統制条件の三種類を作成した。つまり、男性対象評価・女性対象評価の質問紙それぞれで、意思表示部分のみを変化させた三種類を作成したことになる。

自己紹介カード部分には、いわゆる街コン等の出会いのイベントで用いられるような自己紹介のためのカードを想定し、評価対象の情報を記載した。男性対象の場合には、名前（りょう）、年齢（26歳）、住所（仙台市・一人暮らし）、最終学歴（大卒）、職業（自動車メーカー社員）、勤務地（仙台市）、家族構成（親と姉）の他、趣味・特技やデートに行きたい場所、お酒・たばこの嗜好など、そして年収（350～500万円）を記載した。女性対象の場合も同様に、名前（あやな）、年齢（24歳）、住所（仙台市・一人暮らし）、最終学歴（大卒）、職業（会社員（お薬屋さん））、勤務地（仙台市）、家族構成（親と弟）、趣味・特技などに加えて、得意料理（トマト煮込みハンバーグ、麻婆豆腐）を記載した。

意思表示部分は自己紹介カード部分に続いており、「この相手と話をしてみたところ、この相手は、『もしも良い相手がいれば結婚も考える。…』と言っている

した。」という文章を挙げて、「…」の部分の記述を条件ごとに変化させた。主義条件では『仮に結婚することになった場合、個人的な考えとして自分の子どもを望まない。身体的には全く健康なのだけれども』という記述、病気条件では『仮に結婚することになった場合、病気のために自分の子どもを望めない。日常生活には全く支障がない病気なのだけれども』という記述を挿入し、統制条件では何も挿入しなかった。

質問項目は、対象の特徴に関する項目と、様々な関係の相手としての魅力を問う項目とで構成した。相手の特徴については、Eastwickらの研究（Eastwick & Finkel, 2008; Eastwick et al., 2011）を参考にした身体的魅力（見た目の良い、セクシーな他）、将来性（野心的な、有能な他）、人柄の良さ（愛情深い、楽しい他）の全19項目に回答させたが、この研究の分析では用いない。相手の魅力については、「先ほどの男性（女性）は、次に挙げるような関係の相手としてどの程度魅力的であると感じられますか」という文に続いて、「友人として付き合う相手」「一晩限りの性的な関係の相手」「恋人として交際する相手」「結婚する相手」のそれぞれの場合について「-3. 全く魅力的ではない」～「3. 非常に魅力的な」の7段階で評定させた。最後に、性別（男性・女性・その他）と性的指向（異性愛・その他）等のデモグラフィック項目に回答させた。

3. 手続き

大学の講義内であるいは個別に「他者の印象に関する調査」と記載した質問紙を配布し、中の人物についての情報を読んで質問に回答するよう求めた。

この際、男性対象の質問紙には、回答者が「異性愛の女性」であるならば「自分自身が相手に対して抱く気持ち」を回答すること、回答者が「異性愛の女性以外」であるならば「一般的に考えて、この相手はどのような印象であると思うか」を考慮して回答するよう質問紙の表紙に記載して教示した。女性対象の質問紙には、それぞれ回答者が「異性愛の男性」であるときと「異性愛の男性以外」であるときで教示を変えた。

4. 倫理的配慮

本研究では、質問紙の表紙に、性別と性的指向（異性愛かそうでないか）等を問うこと、回答は無記名で統計的に処理されること、回答は任意で、回答の拒否・中止によって成績等に利益・不利益は発生しないこと、これらを理解した上で回答しても良いと考える人に回答してもらいたいこと、回答をもって研究協力の同意

と見なすこと、研究責任者の連絡先を記載した。参加者にはこの記載を見せながら説明を行い、さらに質問紙を開いて実際の質問項目を確認してもらった上で、回答しても良いと考える人は回答し、そうでない人は無回答のまま返却するよう教示した。また、研究に関連した疑問や何らかの問題が発生した場合には、研究責任者に連絡をするよう求めた。匿名性保護のため、質問紙の回収では、回答・無回答を含めた回答内容を判別できないような、専用の回収箱を用いて回収した。結果、これらに関連した問題は発生しなかった。

Ⅲ. 分析と結果

男性対象の質問紙と女性対象の質問紙はプロフィール情報の内容が異なるので比較できないため、それぞれを別々に分析することとした。独立変数は、評価者の性別と指向（被験者間：異性愛異性・それ以外）、子どもを持たない意思表示（被験者間：統制・主義・病気）、想定する対象との関係（被験者内：友人・一晩限りの性的関係・恋人・結婚相手）で、従属変数は魅力評価である。分析にはSPSS Statistics 28を用いた。対象との関係要因（被験者内）は球面性の仮定が満たされなかったため、この要因に関わる検定ではGreenhouse-Geisserの自由度調整によるF値を用いた。

1. 男性対象の評価

男性対象の評価を行った者194名の回答について、対象との関係ごとに魅力評価の平均値を算出した。これについて評価者の性別と指向（2）×子どもを持たない意思表示（3）×想定する対象との関係（4）の分散分析を行った。すると、関係の主効果が有意であり（ $F(2.42, 454.80) = 88.30, p < .001, \eta^2 = 0.32$ ）、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、対象は友人 > 恋人 > 結婚相手・一晩限りの相手である場合の順に有意に魅力的と見なされていた（友人: $M = 1.07, SD = 1.27$; 恋人: $M = 0.06, SD = 1.56$; 結婚相手: $M = -0.36, SD = 1.59$; 一晩限り: $M = -0.57, SD = 1.62$ ）。また、意思表示の有意な主効果が見られたため（ $F(2, 188) = 5.33, p = .006, \eta^2 = 0.54$ ）、多重比較を行ったところ（Bonferroni法）、統制条件と病気条件は主義条件よりも有意に魅力的と見なされていた（統制: $M = 0.20, SD = 1.22$; 病気: $M = 0.27, SD = 1.11$; 主義: $M = -0.32, SD = 1.05$ ）。そして、評価者と対象との関係の交互作用が有意であり（ $F(2.42, 454.80) = 6.10, p = .001, \eta^2 = 0.03$ ）、単純効果の検定を行った。その結果、一晩限りの相手の場合に、異性

愛の女性以外の方が異性愛の女性よりも有意傾向で相手を魅力的と評価していた（一晩限り: 異性愛の女性以外: $M = -0.37, SD = 1.63$; 異性愛の女性: $M = -0.79, SD = 1.58$ ）。また、恋人の場合と結婚相手の場合に、異性愛の女性以外の方が異性愛の女性よりも有意に相手を魅力的と評価していた（恋人: 異性愛の女性以外: $M = 0.32, SD = 1.50$; 異性愛の女性: $M = -0.24, SD = 1.57$; 結婚相手: 異性愛の女性以外: $M = -0.10, SD = 1.57$; 異性愛の女性: $M = -0.65, SD = 1.57$ ）。さらに、意思表示と対象との関係の交互作用が有意であり（ $F(4.84, 454.80) = 4.85, p < .001, \eta^2 = 0.05$ ）、単純効果の検定を行った。その結果、Figure1に見られるように、一晩限りの相手の場合に、病気条件の方が統制条件よりも相手を有意に魅力的と評価していた（一晩限り: 病気: $M = -0.14, SD = 1.50$; 統制: $M = -0.89, SD = 1.53$ ）。また、恋人の場合と結婚相手の場合に、統制条件の方が主義条件よりも相手を有意に魅力的と評価していた（恋人: 統制: $M = 0.38, SD = -0.42$; 主義: $M = -0.42, SD = 1.49$; 結婚: 統制: $M = 0.10, SD = 1.68$; 主義: $M = -0.98, SD = 1.39$ ）。そして、統制条件でBonferroni法による多重比較を行ったところ、友人 > 恋人と結婚相手 > 一晩限りの相手である場合の順に有意に魅力的と見なされていた（統制: 友人: $M = 1.22, SD = 1.07$; 恋人: $M = 0.38, SD = 1.62$; 結婚相手: $M = 0.10, SD = 1.68$; 一晩限り: $M = -0.89, SD = 1.53$ ）。また、主義条件と病気条件でそれぞれBonferroni法による多重比較を行ったところ、友人の場合には他の相手の場合よりも有意に魅力的と見なされ、そして、恋人の場合には結婚相手の場合よりも有意に魅力的と見なされていた（主義: 友人: $M = 0.82, SD = 1.38$; 恋人: $M = -0.42, SD = 1.49$; 結婚相手: $M = -0.98, SD = 1.39$; 一晩限り: $M = -0.71, SD = 1.74$; 病気: 友人: $M = 1.18, SD = 1.30$; 恋人: $M = 0.21, SD = 1.47$; 結婚相手: $M = -0.18, SD = 1.51$; 一晩限り: $M = -0.14, SD = 1.50$ ）。

2. 女性対象の評価

女性対象の評価も、182名の回答について対象との関係ごとに魅力評価の平均値を算出した。これについて評価者の性別と指向（2）×子どもを持たない意思表示（3）×想定する対象との関係（4）の分散分析を行った。関係の主効果が有意であり（ $F(2.39, 419.74) = 43.57, p < .001, \eta^2 = 0.20$ ）、Bonferroni法による多重比較を行ったところ、対象は友人 > 恋人 > 結婚相手・一晩限りの相手である場合の順に有意に魅力的と見なされていた（友人: $M = 1.30, SD = 1.16$; 恋人:

$M=0.80$, $SD=1.49$; 結婚相手: $M=0.37$, $SD=1.58$; 一晚限り: $M=0.02$, $SD=1.36$)。そして評価者と対象との関係に有意傾向の交互作用が見られ ($F(2.39, 419.74) = 2.72$, $p=.057$, $\eta^2=0.02$)、単純効果の検定を行った。Figure 2にあるように、恋人の相手の場合に、異性愛の男性以外の方が異性愛の男性よりも有意傾向で相手を魅力的と評価していた(恋人: 異性愛の男性以外: $M=-0.96$, $SD=1.39$; 異性愛の男性: $M=0.57$, $SD=1.53$)。また、異性愛の男性と異性愛の男性以外でそれぞれ Bonferroni法による多重比較を行ったところ、異性愛の男性では友人>恋人>結婚相手と一晚限りの相手の順、異性愛の男性以外では友人と恋人>結婚相手>一晚限りの相手の順に、有意に魅力的と見なされていた(異性愛の男性: 友人: $M=1.35$, $SD=1.03$; 恋人: $M=0.57$, $SD=1.53$; 結婚相手: $M=0.15$, $SD=1.61$; 一晚限り: $M=0.09$, $SD=1.41$; 異性愛の男性以外: 友人: $M=1.27$, $SD=1.25$; 恋人: $M=0.96$, $SD=1.39$; 結婚相手: $M=0.52$, $SD=1.55$; 一晚限り: $M=-0.04$, $SD=1.33$)。

IV. 考察

本研究は、子どもを持たない意思表示を行う人物に対する印象の検討を目的とした。結婚に対する認識の変化とともに、子どもを持つことに対する認識も変化してきている。その選択により、旧来であれば否定的な印象が想定されたかもしれないが、現在ではそれは無くなっていることが考えられた。一方で対人魅力の研究によれば、その意思表示は自分自身の遺伝子を次世代に伝える可能性を閉ざすことを表明するものと読み取れるため、相手に対する魅力を減じる可能性が考えられた。これらの議論のそれぞれにおいて、この意思表示の対象に対する評価には性差が現れる可能性が考えられ、一定の予測を立てることは困難なように思われた。そこで本研究では、研究参加者に相手についての一定のプロフィール情報を提示して、その相手が子どもを持たない意思表示を行うかどうかを操作する探索的な質問紙研究によって、この印象を検討することとした。本研究では特に、当人が病気のために子どもを持たないと述べる病気条件と、個人的な考えとして子どもを持たないと述べる主義条件を設けて、何も述べない統制条件と比較し、さらにこれらの各条件で、様々な関係性の相手としてどの程度魅力的であると見なされるのか、そしてそれらは、相手を異性愛の対象として見なす回答者であるかどうかで異なるのかを比

較検討することとした。

分析の結果、子どもを持たない意思表示はそれをする対象の性別によって印象への影響が異なり、女性対象の場合、意思表示は印象評価に影響していなかったが、男性対象の場合には、特に主義条件で魅力評価が下がっていた。

この結果は、結婚観や子ども観に関する近年の調査研究(コルムシ, 2019; 丸岡, 2016)の方の予測に近い。女性対象の場合には、少なくとも本研究では、旧来の「女性の役割は子どもを産むこと」というステレオタイプ(竹家, 2008)から想定されるような否定的な印象を持たれることは無かった。子どもを持つにあたって実際に負担が大きい性別であることから、男性の場合よりも当人の事情や意思がより尊重される結果として、または、参加者がステレオタイプの女性像にとらわれないように意識した結果として、意思表示は印象に影響を持たなかったのかもしれない。その一方、男性対象が個人的な考えとして意思表示を行うと、丸岡(2016)やコルムシ(2019)が指摘したような結婚・子どもへの負担感を回避したい心情と読み取られてしまうのだろうか。それによって冷たいとか頑固とか、場合によっては自分勝手な印象が形成されてしまうのかもしれない。あるいは、この性差は実際に男性の側にそもそも子どもを望まないという考えの人が増えていることを反映しているとも考えられる。本研究では評価者本人が子どもを望むか否かという変数を測定しなかったため、この可能性については確認できなかった。

病気条件は、男性対象で一晚限りの相手を想像する場合を除いて、統制条件とは異ならなかった。本研究の主義条件と病気条件は、子どもを持たない理由に関する身体機能の面での差異を反映する二つの条件として設定したが、男性対象の病気条件が一晚限りの相手として統制条件よりも相対的に魅力的に評価されている結果からは、参加者たちがこの差異を認識していたことは読み取れる。だが、男性対象・女性対象共に、意思表示と回答者が異性愛者かどうかには交互作用は見られなかったことから、少なくとも本研究においては、実際に相手をパートナーとして考える時に、自分の子どもを持つことができるかどうかという見通しは相手の評価にあまり影響を持たなかったということになる。それよりも参加者たちにとっては、意思表示から推測される上述の人柄の方が影響は大きかったのだろう。

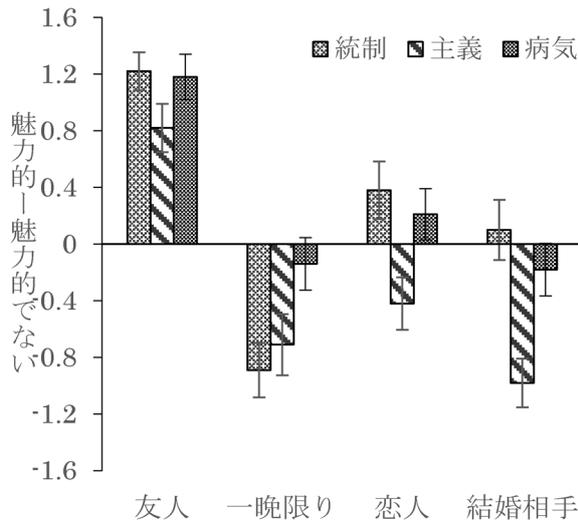


Figure 1
男性対象の評価に関する意思表示条件ごとの差異
注) エラーバーは標準誤差を示す。

意思表示との交互作用は見られなかったが、本研究での結果に性別・性指向の影響が全く無かったというわけではない。男女ともに対象を異性愛の相手として見る参加者はそうではない参加者よりも、対象を友人以外の関係性の相手として見る場合に評価が低くなっており、女性の場合には特に恋人として、結婚相手としての場合に評価が厳しかった。異性愛の相手として見る参加者は、実際のパートナーになる可能性を想定するため、一般的な評価とは異なる厳密な見方になったことが考えられる。

本研究の結果は男女の魅力の進化論的な説明には合致していないが、このことには手法的な差異も考慮に入れる必要がある。本研究で用いた印象評価のような手法は、遺伝子の継承可能性に関わる生物学的・根源的な欲求が反映されるものというよりは、むしろ社会的・文化的な影響やそれによる意識的なコントロールの影響を大きく受ける測定方法であるだろう。そのため、本研究での意思表示に仮定したような進化論的な欲求を反映する魅力の評価は、Eastwick & Finkel (2008) や、Eastwick et al. (2011) のように、素早い直感的な判断を求められるものや、意識的なコントロールが及びにくいような手法の方に現れやすいのかもしれない。顕在的な手法の一つによる本研究の結果は、別の手法による結果との比較検討も必要である。そして、もしも測定手法によって結果に差異が生じる

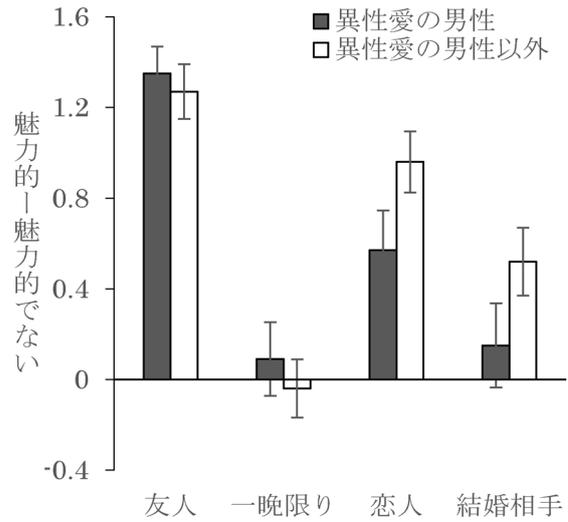


Figure 2
女性対象の評価に関する評価者の性別・性指向ごとの差異
注) エラーバーは標準誤差を示す。

のならば、本研究の結果の意味も他の手法の結果との対比によってより明確になることだろう。Eastwickら (Eastwick & Finkel, 2008; Eastwick et al., 2011) の手法のような意図的なコントロールが介在しにくい評価が実際のパートナー選択を予測するのならば、本研究のような顕在的手法による印象評価は何を意味することになるのか。Eastwick & Finkel (2008) は、質問紙のような顕在的指標で表される異性の好みは、思考が介在したもっともらしい合理的な反応を意味する可能性、あるいはパートナー選択ではなくパートナー維持のための反応を意味する可能性を示唆している。例えば本研究の結果が子どもを持たない意思表示の対象に対する現在でもっともらしい合理的な反応を意味するのだとすれば、そこには現代社会の思想や価値観あるいはステレオタイプが反映されていることが考えられる。例えば当人の伝統的性役割観や性役割ステレオタイプなどの変数と、様々な手法を用いて測定された対象評価との関係から、その結果が示すことの意味を明らかにすることができるのかもしれない。本研究では、子どもを持たない意思表示は限られた条件でその対象の印象に影響を及ぼすことが示されたが、この意思表示が人々の行動選択に及ぼす効果やその社会的な意味の全体像はまだ明らかではない。それは、異なる測定手法やその他の変数の影響も考慮に入れて検討し、本研究の結果を補完することによって、

見えてくるだろう。

引用文献

- Buss, D. M. 1989 Sex differences in human mate preferences: Evolutionary hypotheses tested in 37 cultures. *Behavioral and Brain Sciences* 12 1-49.
- Buss, D. M., & Schmitt, D. 1993 Sexual strategies theory: An evolutionary perspective on human mating. *Psychological Review* 100 204-232.
- Eastwick, P. W., Eagly, A. H., Finkel, E. J., & Johnson, S. E. 2011 Implicit and explicit preferences for physical attractiveness in an romantic partner: A double dissociation in predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology* 101 991-1011.
- Eastwick, P. W., & Finkel, E. J. 2008 Sex differences in mate preference revisited: Do people know what they initially desire in a romantic partner? *Journal of Personality and Social Psychology* 94 245-264.
- Finkel, E. J., & Eastwick, P. W. 2015 Interpersonal attraction: In search of a theoretical rosetta stone. M, Mikulincer., & P. R., Shaver (Eds.) *APA handbook of personality and social psychology, Vol.3, Interpersonal relations.* 179-210.
- Finkel, E. J., Hui, C. M., Carswell, K. L., & Larson, G. M. 2014 The suffocation of marriage: Climbing mount Maslow without enough oxygen. *Psychological Inquiry* 25 1-41.
- Griskevicius, V., Haselton, M. G., & Ackerman, J. M. 2015 Evolution and close relationship. M, Mikulincer., & P. R., Shaver (Eds.) *APA handbook of personality and social psychology, Vol.3, Interpersonal relations.* 3-32.
- 平井太規 2019 妊娠先行型結婚と子ども数：JGSS-2009LCSの分析から *社会学雑誌* 35/36 211-225.
- 伊藤泰郎 1997 意識の規定要因としての社会的ネットワーク—結婚・出生に関する規範意識を中心に— *総合都市研究* 64 61-73.
- 川名好裕 2011 外見から推定される男性の魅力 *立正大学心理学研究所紀要* 9 89-101.
- 川名好裕 2013 外見から推定される女性の魅力 *立正大学心理学研究所紀要* 11 13-23.
- 国立社会保障・人口問題研究所 2023 2021年社会保障・人口問題基本調査（結婚と出産に関する全国調査） 現代日本の結婚と出産—第16回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書一.
- コルムシ・オリガ 2019 ジェンダー意識は結婚への移行に影響を与えるのか—パネルデータを用いた男女比較分析 *ジェンダー研究* 22 169-179.
- 厚生労働省 2023 令和4年（2022）人口動態統計月報年計（概数）の概況.
- 丸岡里香 2016 高校生のライフイメージについて：高校生から大学生の変化 *北翔大学教育文化学部研究紀要* 1 145-153.
- 永井暁子 2011 特別寄稿：若者はなぜ結婚しないのか *生活福祉研究* 77 1-11.
- 内閣府 2022 令和3年度少子化の状況及び少子化への対処施策の概況（令和4年版少子化社会対策白書）.
- 大和田智文 2020 少子化に影響を及ぼす心理・社会的要因に関する検討 *江戸川大学紀要* 30 335-347.
- 竹家一美 2008 不妊治療を経験した女性たちの語り—「子どもを持たない人生」という選択 *質的心理学研究* 7 118-137.
- 和田実 2016 魅力の理論 和田実・増田匡裕・柏尾眞津子（編）*対人関係の心理学 親密な関係の形成・発展・維持・崩壊* 北大路書房 37-48.
- 山田昌弘 2017 「子どもにつらい思いをさせたくない」—少子化問題の日本の特徴について *医療と社会* 27 41-51.